

6月、むつ市の南に接する横浜町で情報があり、同26日に森らがタイワンザルのオス1頭を捕獲した。

10月から11月にかけて、飼育地の南側で3頭が計6回目撃され、タイワンザルであることが確認されている。むつ市内では5回の情報があり、ニホンザルであることを確認したが、東通村の3頭はいずれか確認されていない。

ニホンザルの群れについては、昨年度の報告に加えて大畑川流域での情報が増加している。M・Z・I群、脇野沢村4群の直接観察があるが、いずれも交雑の確認はない。

自由29：

東北地方北部におけるニホンザルの分布特性とその歴史の変遷について

三戸幸久（日本モンキーセンター）

現在の東北地方北部三県下におけるニホンザルの群れの分布地は少なく、孤立している。調査の結果、このように少ない分布地域と広域な空白地帯は、強力な狩猟圧によって形作られたことが明らかにになった。

ニホンザルは江戸時代中ごろまでは東北地方の山陵地帯のほぼ全域に生息していたと考えられるが、衰微の傾向が現われるのは、天明などの飢饉があいついだ時期であると推定される。この頃、農作物は不作で、主に、不足する食料を補うため盛んに鳥獣が狩猟された。これを担ったのは専門的狩猟活動であり、普及した火縄銃であった。平野部の群れはこの時期までに消滅していたが、新たに分布が孤立した地域は、旧南部領の上北地方、三戸台地、平内・東岳山地、早池峰山以北の北上山地および東・西磐井郡、気仙郡など仙台領域。秋田領では森吉山系北東部、笹森丘陵などである。

第二の衰退期は、明治時代に入ってからである。この時期も気候は不順で、食料事情は悪く、生活実態も江戸時代とあまり変っていない。このような状況の中で、村田銃・連発銃が急速に普及し、簡単に入手・携帯できるようになる。このためサルの群れは各地で狩り尽くされ、次々と消滅していく。明治から大正にかけての特徴は、まず岩手県で地域的な絶滅があいつぎ、つづいて秋田県でも狩り尽くしによる孤立・消滅の傾向が顕著にな

ることである。青森県下北・津軽両半島では狩猟も行われているが、漁業に依存する割合が多く、北辺の半島部であることから猟師の入り込みも少なく、消滅までにはいたっていない。

つづく大正から昭和・大戦後という時代では、岩手・秋田両県下のほとんどの群れが消滅し、青森県下でも分布地が孤立する傾向が強まる。現在、岩手県では北上山地南部の仙人峠・五葉山山塊、秋田県では北部の白神山地が生息地として認められるのみで、青森県では下北・津軽両半島と、西津軽郡から中津軽郡にまたがる広い山岳地帯の生息地だけが残っている。この地域の生息状態は、かつての東北地方のニホンザルの分布がどのようなものであったかを知る上でも貴重である。

以上、東北地方のどの山野にもいたと思われるニホンザルは、江戸期から昭和にかけて消滅していった。この間の群れの分布変遷を巨視的に見れば、分布域は一貫して縮小あるいは劣化しており、生息条件が好転した地域はない。

自由30：

脈管系における内皮細胞性調節

臼井八郎、倉橋和義

（京都大・放射性同位元素総合センター）

私達はこれまで、摘出日本サルおよびイヌ脳動脈内皮細胞正常標本において、ヒスタミン累積投与によりサル脳動脈で用量依存性弛緩反応を惹起し、イヌ脳動脈で用量依存性収縮反応を惹起した。ヒスタミンによる弛緩および収縮反応は内皮細胞除去することにより減弱する。また、ヒスタミンによるサルおよびイヌ脳動脈の内皮細胞依存性反応はヒスタミンH₂受容体遮断薬処置で影響を受けないがヒスタミンH₁受容体遮断薬処置により抑制されることから、ヒスタミンによって惹起されるサルおよびイヌ脳動脈の内皮細胞依存性反応はヒスタミンH₁受容体を介すること、サル脳動脈では内皮細胞由来動脈弛緩物質（EDRF）、イヌ脳動脈では内皮細胞由来動脈収縮物質（EDCF）の遊離によるであろうことを報告してきた。さらにヒスタミンによるEDRはcyclooxygenase阻害薬であるアスピリン処置で影響を受けないがEDCは著明に抑制されることから、日本サル脳動脈のEDRFはcyclooxygenaseの代謝産物によらないこと、イヌ脳動脈のEDCFは